

注解『七十一番職人歌合』稿(三)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には『七十一番職人歌合』の中、第八番から第十番までの注解を収めた。

八番 筆結 莚打

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕七番右 莚打

うちおける恋のさむしろいたつらにねぬ夜のつきにしくものそなき

……右、恋のさむしろ、さもとおほえて、大江千里か、くもりもはてぬ春の夜とよみけん事、おもひ出られて、
今すこしねぬ夜の月に心ひかれ侍り。

かりすかす蘭田のほそ江のうきぬなはくるしきものをしたのおもひは

……右の歌のうきぬなは、今すこし上手のしわざと覚て、住吉玉津島もさためてゆるし給ふらん。

〔鶴岡放生会職人歌合〕八番右 筆生

水くきの岡へにわれは家あせん月に外の毛のすゑをそろへて

人してそおもふ心をいはずへきふてには跡のみえもこそすれ

判云、月は……、右、みつくきの岡へをしめて月の外のけのといへる事のよせ、物のゆへありてや侍らん。
仍、勝と申侍へし。恋は右哥、つねきく心地して、めさむる所も侍らす。左歌、……可為勝敗。

注解『七十一番職人歌合』稿(三)

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 九番右 むしろうち
 打たへて糸めまはらのあらむしろいのねらるへき月の影かは

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 薙打 敷物の打ちをく薙がまぐちは螢と成りて尻や光らん 波の打つ葦屋の根太の蒲筵螢と成りて敷く物もなし / 筆結 手習ひし稚児も若衆もゆふ筆の数かく物は小新発意哉 〔吾吟我集〕 寄筆恋 秋山に妻恋ひかぬる鹿の毛の筆はいまはんくどきやる文 〔古今夷曲集〕 寄筆恋 宵々に人待つ床の寝筵はあふみ表にしく物ぞなき 〔訓蒙図彙〕 筆工 ふでゆひ 〔長崎一見 職人一首〕 十四番左 筆屋 鹿の毛の筆で紅葉の秋はかけどいふにいはれぬ春の花かな 左の歌 菊の花咲く秋はあれどのおもかけに似たり。右は……面白くこそ侍る。〔大団〕 寄筆恋 うき名をばゆひたてられし筆の毛のしかと逢ふ夜はいまだなけれど / 寄筆恋 道風の名立てなるらく書く文に思ひあまれば手もふるひ筆 〔人倫訓蒙図彙〕 筆師 筆は文武菩薩の指を表するとかや。筆の長四寸二分とかや。筆、日本にては丹後野崎の与松といふ者に、切戸の文殊児と化して教へ給ふとかや。諸流におるて品々の筆形あり。又絵筆、蒔絵筆、別に結び手あり。京の筆師、川原町二条上ル丁、祐以、祐二、寺町通松原上ル丁、裏辻和泉、二条通間町の西、小法師等、其の外所々にあり。筆の毛外に売り手あり。江戸福用小法師、福永通町にあまたあり。 / 薙打 釈尊鹿野園にして御法を説かせ給ふとき、草葉を座とし給ふ。これ草筵の始めとかや。山賤の業としてこれを作る。都へも持ち出でてこれを売る。常に商ふ所は、堀川通の上、高倉通三条上ル丁、其の外端々にあり。 / 臥座打 上敷、置表など、これも民家の業として都に出だす。丹波、近江にこれを造る。備後に造るは分けて名物なり。絵筵は都におるてこれを造る也。其の外、夷中よりも出だすなり。〔用明天王職人鑑 職人つくし〕 ここに見えしは筆結の、千年の昔千里の海、隔てし中の通ひ路も、物言ひ交はず中立ちは、仮名書き筆の仮名文に、真書き筆の真実の、法の教へも学ばせて、人の心に花咲けば、身も奈良油煙手合はせに、朽ちぬ宝や握り墨……〔華紅葉〕 ある女のもとより古き筆をくれよとありしに、寄古筆恋 玉章に書き尽くせどもつれなくて我が身もともに絶へむ命毛 〔狂歌乗合船〕 寄筆恋 今宵しも御意を絵筆の細う長うしんから情かけてたまはれ 〔今様職人尽百人一首〕 〔筆屋〕 夏毛おぼまたこのごろやりきらず冬毛出来さん暇ぞほしきよ 〔十六文持つて来ました〕 「手習い筆か」 〔彩画職人部類〕 筆 上代始めて造る所、詳かならず。ことの製する所も又異なり。今の毫は蒙恬より伝へて毛穎を製す。拾遺愚抄 定家 主や誰見ぬ世の事を写し置く筆のすさみに浮かぶ面影 〔職人尽発句合〕 八番左 筆結 命毛も縮まるほどの寒さかな 〔大谷殿のお好みに合ふは出来にくし〕 左りは寒さを嘆きたるに、右は……心ありて殊勝なれば、勝とすべし。 / 九番左 薙打 春風に通ふ緒琴の筵売 いづれの緒より調べ初めけむの歌に寄せし、心ある薙打なれや。……持にこそ定め侍らめ。〔江戸職人歌合〕 十九番左 筆結 秋の夜の月の兔もあるものをあはれ冬毛と何思ふ覧 右不難申。…判云、左歌、職分の冬毛をも忘れて、秋の兎輪をめづる意とは聞こえたれど、などやらむ、冬毛よりも月の兔の毛は勝りたれば剃き取らばや、といへるやうにも聞こえて、情なくや。右、……尤も勝とす。無筆とて文も見入れぬ人ぞ憂き我が結ふ筆は書き尽くしても、右難申云、無筆といひ、我が結ふ筆といへる、同字歟。……判云、無筆といふは文字知らぬ者の事なれば、我が結ふ筆と同心にあらず。病とす

べからざる歎。然而亦庶幾せざる事歎。右、……勝たるべき条勿論歎。〔略画職人尽〕磨る墨の水も含めど結ふ筆に月の鼠の髭やよふらん〔宝船桂帆柱〕筆師、すきはひの得意は増へて大文字の筆の命毛長き繁昌「蒙恬筆を造ると呂氏春秋に見へたり。筆は打物といふから先が切れる」〔難波職人歌合〕下、八番左、筆屋、いとせめて恋しき人の口にさす赤き筆ともなりにてしが、右の方人云、紅筆となりて女の口に近寄らむとは、余りに心あきらかに聞こえて、声を高うしては読み浮かべ難し。判に云、……左の徒えて俳諧めきたるも、猶勝たるべし。

【本文】

八番

ふてつかにきりつゝめたるさゝ竹の
なかき夜しらす月をみるかな

うちたへていと目まはらのあらむしろ
いのねらるへきつきのかげかは

左、筆つかにきりつゝめたるといひて、

すゑに、なかき夜しらぬとよめる、たくみ也。

右、始中終当道をのへたり。これ又
すてかたし。よき持にて侍なり。

なひくほといかゝゆはましわかためは
夏毛のふてのこゝろこはさを

こひしさのこゝろものへぬひとりねは

九条むしろもせはからぬかな

ふてはいふはかりなくおもしろく、むし
ろはうちすてかたし。これもよき持に

注解『七十一番職人歌合』稿(三)

ふてつかに―〔類〕筆つかに

なかき夜―〔類〕永夜 かな―〔明〕〔類〕哉

うちたへて―〔忠〕〔明〕うちたえて〔類〕打絶て いと目―〔類〕いとめ あらむしろ―〔類〕あらむ

つきのかけ―〔類〕月の影

筆つか―〔類〕筆柄

すゑ―〔類〕末

これ―〔類〕是

すてかたし―〔類〕捨かたし よき持にて侍なり―〔忠〕これもよき持にこそ

わかため―〔類〕我為

ふて―〔類〕筆

こひしさ―〔類〕恋しさ こゝろ―〔類〕心 ひとりねは―〔白〕ひとりね〔類〕独寝は

いふ―〔尊〕〔白〕〔忠〕〔明〕ゆふ

これ―〔類〕是

こそ。

筆ゆひ

うのけは

毛のうら面

みえぬか

大事にて。

むしろうち

てしまむしろ

かうしまへ。

御さも候ぞ。



筆ゆひ一〔忠〕八番 筆ゆひ

うら面一〔類〕うらおもて

みえぬ一〔白〕〔忠〕見えぬ

大事にて一〔白〕〔忠〕大夏にて候〔類〕大事にて候

むしろうち一〔白〕〔忠〕〔類〕莚うち

てしまむしろかうしまへ御さも候ぞ一〔白〕ナシ

かうしまへ一〔明〕かうまへ〔類〕かしまへ

【語注】

◎莚打は、本来、莚を打つ職人であるが、東博本系統の絵では、莚を売っているところを描く。生産と販売が未分化であったのであろう。筆結と莚打との関係は未考。

◎ふでづか〔筆柄〕 筆の軸。

◎きりつづめたる 「約む」は、短くすること。筆柄にするため短く切った。

◎さく竹 「笹竹」は、小さい竹、すなわち、笹。また、「笹竹の」は、竹の「節よ」に通じるところから、「夜」「代」「齡」等に掛かる枕詞として用いられて来た。ここでは、「筆柄に切り約めたる笹竹の」が、全体として「長き夜知らず」の序詞となっている。

◎ながき夜しらず 「長き節」に「長き夜」を掛ける。「節」は節と節との間。筆柄に切り約めたから、長き節が知れないのである。そのように、秋の長き夜も知らないで月を見る、と続く。「長き夜知らず」月を見る、という言い方は余り例がないが、「長き夜飽かず」などと同じく、美しい月を眺めていると、秋の夜も長いと感じられないほど時間が早く経ってしまうこと、をいうのであろう。

◎うちたへて…… 「飛鳥井雅康 職人歌」九番右、むしろうちの歌に同じ。

◎うちたへて 動詞「打ち絶ゆ」から来た副詞。この語は、普通、下に打ち消しの語を伴って、全く（……ない）、という意味を表すが、ここでは、「糸目疎ら」という、事実上否定に近い内容を修飾している、と見てよからう。蕙を「打つ」の「打ち」を掛ける。

◎いと目 「いと目」は「糸目」で、蕙の縦糸と縦糸との間隔をいうのであろう。

◎あらむしろ 粗く編んだ粗悪な蕙。「打ち絶へて糸目疎らの荒蕙」が下句の序詞となっている。『日本職人辞典』は、「荒蕙だから……とてもこんな物の上で眠られるものでない。ただ月を眺めて独寝をかこつのみ」と解するが、上下句の繋がりをおこのように因果関係で解釈すると、月を愛でたことにならない。「独寝をかこつ」というのも、月の歌にはふさわしくない。

◎いのねらるべきつきのかげかは 「寝を寝」は、寝ること、で、「蕙」の縁語。また、「寝」に、蕙の材料「藺」を掛けるか。粗悪な蕙では安眠出来ない。そのように、夜も落ち着いて寝ていられないほど美しい月影だ、というのである。「敷栲の枕の塵や積もるらん月の盛りは寝こそ寝られねへ源頼家」（後拾遺、十五、雑）などを念頭に置いての作であろう。

◎始中終当道をのべたり 終始一貫、蕙打の職能のことを述べていてよい、というのである。初句から第四句までがすべて、直接蕙打に関わる内容なので、そのことを言うのであろうが、その点に関してなら、左の筆結の歌も同様である。特に蕙打の歌についてこう評したのは、この歌が、月の美しさを褒め讃える「寝の寝らるべき月の影かは」という言葉を引き出すのに、粗蕙の不都合さという、マイナーなことがらをもってした強引さが買われたのである。

う。本来、結び付きがたい、蕙打の職能と月とを、強引に結びつけるという点に職人の歌としての面白さがあるのだが、その上、粗蕙を編むという、蕙打にとって決して名譽にならない内容をもっているで、一首はなおさら滑稽を増すこととなった。その点が作者の手柄だと言えよう。「当道」については、四番語注「我道のさいかく、まことにきこえたり」の項参照。

◎よき持 左右とも優れていることによる持。なお、忠寄本に「これ、もよき持にこそ」とあるのは、恋の歌の判詞を誤写したものであろう。

◎なびくほどいかゞゆはまし 「靡く」は、筆先がしなやかに動くことを言うか。下旬に「夏毛の筆の心こはさを」とあるから、しなやかに仕上げるのがむつかしいのであろう。筆が「靡く」に、求愛に応える意の「靡く」を掛け、「結はまし」に、「言はまし」を掛ける。筆がよく靡くように、どのように結おうか。あの人が自分に靡くように、どのように言葉を掛けようか。

◎わがためは 「心こはさ」に掛かる。他人には打ち解けるくせに、私に對してばかりは。

◎夏毛のふで 鹿の夏毛で作った筆。夏毛は、赤みがかっていて、毛がこわい。『入木抄』に、「上古は多く夏毛を用ふ。一切に通用し候ふ。昔の夏毛、殊勝に候ひき。当世は夏毛わろく成り候うて、先も和そらはず。徒物に候ふ也。仍て、杉原の他は、只卯毛を通用、宜しく候ふ也」(御筆の事)とあり、やや下等の筆とされていたか。『天朝墨談』巻四に、当歌合の歌を引き、「惣て獣の毛は夏はふとくこはく、秋の末に至りては柔く毫先いと細くなるものなり。是を心得ずして筆結ぶは拙し。良工は夏秋の毛をとり合はせて結ぶなり。尤よし」とある。夏毛の筆がこわいように、あの人の心がこわい(つれない)、と続く。

◎心も延べぬ 「心を延ぶ」は、心をのびのびとさせること。こころは、恋に苦しむ心を慰めかねているのである。

「心も延べぬ」とあるのは、独り寝だから場所も取らない、という含み。また、「心も述べぬ」で、相手に思いを伝え得ない意をも懸けるか。「延ぶ」は、「蕙」の縁語。序文語注「おろかなる草のむしろにも心をのへけるあまり」の項参照。

◎ひとりねは 白石本は「は」を脱す。

◎九条むしろもせばからぬかな 「九条筵」については未考。『日本職人辞典』は、「恐らく経糸が九本の狭い筵である」とし、『中世職人語彙の研究』は、「九条の筵座であつかつていた筵ということであろうか。しかし筵座では各地の筵を取りあつかつていた筵である。種類もまちまちであつたであろう。それを一概に九条筵といったとするのは、すこし無理である。特定の筵でなければなるまい」とし、宴曲『双六』を引いて、「古薦・九条筵」ともに博打と關係があり、さほど上質の筵であつたとは思えない」とする。(宴曲『双六』には、「負博突のおかしきは、集りての言種には、各利賽を取り取りに、我先づ前にと争ふ数の下に、敷きつめられては古菰の、そも輔弱氣に見ゆれば、九条筵のうちほど指違をや構えまし」とある。) いずれにせよ、普通より幅の狭い、粗末な筵であつたのであろう。和歌では、「さ筵に衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫〈詭人不知〉(古今集、十四、恋)、「さ筵に思ひこそやれ笹の葉に冴ゆる霜夜の鴛鴦の独り寝〈顯季〉(金葉集、四、冬)のように、「さ筵」という言葉が独り寝の寂しさを表すのによく用いられる。その場合の「さ」は、ほとんど無意味な接頭語と化していたようであるが、とはいへ、本来の「狭」の意味が全く忘れられていたわけでもあるまい。ここでは恐らく、このような「独り寝―狭筵」という伝統的な捉え方を前提に、その狭い筵も、独り寝だから場所も取らず、狭くは感じられない、と転じたのであろう。なお、独り寝の床が広く感じられる、という発想は、伝統的な和歌では知らない。狂言『枕物狂』にも採られた『閑吟集』の歌謡には、「逢ふ夜は人の手枕、来ぬ夜はおのが袖枕、枕あまりに床広し、寄れ枕、こち寄れ枕よ、枕さへに疎むか」とある。

◎ふではいふばかりなくおもしろく、むしろはうちすてがたし 「いふ」は、尊経閣本、白石本、忠寄本、明暦板本は、「ゆふ」。筆の歌は言い様もなく面白く、筵の歌も打ち捨てがたい、というのであるが、筆の縁語「結ふ」、筵の縁語「打つ」を用いて戯れている。

◎兔の毛 兔の毛。また、兔の毛で作った柔らかなくて上質の筆。柔らかな紙に書くのに適する。『夜鶴庭訓抄』に「筆は第一兔毛よし」とあり、『入木抄』に、「凡、筆を用ふる事、料紙により候ふ也。打紙には卯の毛、只の紙には

鹿の毛にて候ふ」(御筆の事)と言ひ、また、「上古は多く夏毛を用ふ。……当世は夏毛わろく成り候うて、……杉原の他は、只卯毛を通用、宜しく候ふ也」とも言う。

◎うのけは毛のうら面みえぬが大事にて 類従本は「……大事にて候」。『天朝墨談』巻四に、当歌合のこの箇所を引き、「毛にうらおもてあり。表は丸く、裏は平らかなり。裏をうらとし、表をおもてとして結ぶを良工とす。かたよりなる筆は書き味甚あしし。師高橋、故源右衛門に、此表裏の覚えありやと問ひ給ひしかば、源右衛門答へけらく、年六十にしてぞはじめて自然と口中に覚えぬるといへり。毛に表裏ある事を知りたりとも、その表裏をそるへる事あたはざればかひなし。源右衛門は自然と其術を得たり。是志のふかきよりして妙に至れる也」とある。これによれば、「毛の裏表」とは、一本一本の毛の肌に近い側と外側との別をいい、筆を結う際にそれらが一方に偏らないで、適当に混ざり合っていることが大事だということであろう。兔の毛はごく柔らかいので、特にこのような注意を必要とし、そのためにはかなりの熟練を要したのではなからうか。『鶴岡放生会職人歌合』八番右、筆生の月の歌の、「卯の毛の末を揃へて」というのも、このことを言うのかも知れない。

◎てしまむしろ…… 白石本にこの言葉がないのは、絵を描き変えた(後述)結果、この言葉と絵とが齟齬を来したため、削除したものであろう。ただし、忠寄本は、白石本の絵を踏襲しつつ、この言葉も残している。

◎てしまむしろ(豊島薙・手島薙) 摂津国豊島郡(現大阪府豊中市・箕面市・豊能郡)産の、蘭で編んだ狭く短い薙か。『日本職人辞典』は、「播州北条(姫路市北条)辺から産する物」とし、『中世職人語彙の研究』は、『諸芸方代物附』の「丹波豊島は上一枚八十文、下は七十文」、および『和漢三才図会』の「出於播州北条」の「狭短。其用亦多」を引く。『庭訓往来』に「手島薙」(四月状返)とあり、近世の注釈書のうち、『庭訓往来註』は、「手島薙手島在丹波、摂州薙、九尺間之薙也」、『庭訓往来抄』は、「豊嶋薙 是ハ摂津国ノ十徳也。多く有ナリ。蘭ヲ多ク作ル所ナリ」、『庭訓往来諺解大成』は、「手嶋 摂州郡名」とする。『撰陽群談』には、「豊島薙 豊島郡ノ一郡ニ属ス。蘭ヲ以テ薙之。世俗豊島席ト云。或ハ豊島ト云テ席ト知レリ。旅人不時ノ兩具トス」(十六、名物土産)とある。野間光辰氏は、『日本永代蔵』二の「立ちさまに人の脱ぎ捨てし豊嶋薙をはづし」の「豊嶋薙」について、「もと

播州北条から織り出した藺筵。狭くて短いが旅行の雨具などに用いる。撰津国豊能郡豊島村からも産したので、豊島筵という（日本古典文学大系『西鶴集 下』）とされる。

◎か〔賈〕うしまへ 明曆板本は「かうまへ」、類従本は「かしまへ」とし、「し」の右に「うい」と校合。「かうしまへ」は「かはしまへ」の転訛であろう。「しまへ」は、尊敬の助動詞「しむ」の命令形。室町時代末期の一時期に用いられたらしい。ここでは、方言的な言い方と見るべきかも知れない（六番語注「かはしまへ」の項参照）。「かうまへ」「かしまへ」ともに、「かうしまへ」の誤脱と思われるが、「かしまへ」は、「かう」という開長音が短音化したものとも取れる。

【絵】

筆結は剃髪して法衣を着る。当歌合の中、僧以外で同様の姿をしている者は、二十四番左の一服一銭、二十六番右の経師、三十二番右の念珠引、五十七番右の調菜など、何らかの意味で寺院に關係のある者が多い。筆結の場合も古くより寺院で筆が多用されたことと關係があらう。左手で筆を持ち、右手で毛を揃えているところ。その横に、小刀二本、毛を切るのに使う台と思われもの、白い毛の入った箱、およびその箱の蓋を置く。明曆板本は、箱の中の毛を描き落とす。腰に提げている物については未考。小学館『日本国語大辞典』は、「提鞘①」（僧侶などが携える小刀）の項にこの筆結の絵（類従本）を挙げる。『法然上人絵伝』卷十七で、聖覚の説法を聴聞に行く鉢叩きが、似た形の物を腰から提げており、これについて『日本常民生活絵引』は、矢立とも線香筒とも見えるとする。この鉢叩きと同様の持ち物は、『一遍上人絵伝』や『遊行上人縁起絵』、『一遍・僧尼躍念仏図』（京都市金蓮寺蔵）などに描かれた時衆僧に多く見られる。白石本は、筆結の前から横にかけて、小刀一本、毛の入った箱、千枚通しのごとき道具、出来上がった筆四本、蓋をし紐で括った箱、それに折り紙のように見える物を描く。忠寄本もこれに同じ。折り紙のような物は未考だが、『職人尽発句合』の筆結の絵に、似た物が描かれている。

筵打は、烏帽子直垂姿に刀を差し、筵を手にしている。その横に別の筵の束。類従本は、胸紐を描き落とす。白石

本は、全く別の絵で、烏帽子肩衣袴姿の男が菴機を前に菴を織っているところ。その右手に妻と思われる女がいて、菴（または藁などか）を通そうとしている。女は小袖を着、赤子を背負い、胸をはだけている。女の前に菴二束。忠寄本も同じ。全体的に白石本系統の絵は、東博本系統の物と小異があるが、大きく異なっているのは、この菴打と第十一番右の浦人の絵である。小異のある物で較べると、東博本系統の本より、より詳しくなっている傾向があり、白石本の方が、新しく絵を描き変えたと見るのが自然であろう。今の場合は、職人名が「菴売」ではなく「菴打」となっていること、また少なくとも月の歌は、菴の販売よりも生産に関した内容であることから、菴を打っている姿に変えたのであろう。

【参考】

○同じくはこれを歌合にせんと水瓶言ひ出したれば、……御硯の兔の毛の筆ぞ書き付けける。

(調度歌合、序)

○山にある兔の毛も白く霜置きて

〈救済〉

(紫野千句、一)

露をたれたる筆の勢ひ

○兔の毛の筆の文字の墨かれ

〈救済〉

(紫野千句、三)

石の上硯の水の少なくて

○君来ずは秋の夜いかか明かさまし

〈弘阿〉

(初瀬千句、四)

○心の中のやさしさはいき

筆結の過ぎがてに見る樺桜

(犬つくば集)

○二三百貫食ひつやしけり

筆結の宿の客人重なりて

(同)

○ 鹿の毛は筆になりても安からじ

つひにれうしの上で果つれば

(同)

○ ここを開けさひ、開けずは戻らふ、佩ひたる太刀に露が置く、く、ここはどこぞよ、堺の浜よ、あふまたここはこぎの浦、く、豊嶋筵を敷ひてはたれを待つ、く、筵、京殿原を待つ筵、く、

(天正本狂言『西の宮参』)

○ しめぢがはらだちや、よしなき恋をすが筵、臥して見れどもをらればこそ、苦しや独り寝の、我が手枕の肩替へて、持てども持たれず、そも恋は何の重荷ぞ

(閑吟集)

○ 鹿の腹毛を抜いては筆に結われた、筆に結ふてはみな法華経を書かれた

(田植草紙)

○ われらは鷲ペンベナス・デ・パトまたは他の鳥の(羽の)ペンを用いて書く。彼らは、野兔の毛と、竹の柄で作られた絵師の筆で書く。

(日本覚書、十)

○ 筆は長さが一パルモペーナ(約八寸)で、手の小指ぐらいの大きさの小さな毛筆ペンセイルである。字を書く先〔鋒〕は、兎その他の動物のごく細い腹の毛からできている。その毛からは絵を描く筆も作られる。そしてこの筆の使用はきわめて広くゆきわたっているのです、それを製作することによって生活し、この技術においてきわめて優秀な職人〔筆結〕がいる。またさまざまな文字にむいたさまざまな筆がある。

(日本教会史、二巻六章)

九番 炭焼 小原女

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕 十一番右 大原人

すみ木つむ山路のいほにたつ烟こよひの月にこゝろよわかれ

……右哥、姿よろしく侍るうへに、こよひの月に心よわかれとよまれたる、力不及。右の勝とすへし。

うき身には数はつかしくゆふはきのそのむすひめもあらはこそあらめ

……右、何となくなたらかにて、能き此道をしれる人のしわざ成へし。大原の里には、神のちかひにて、男にられたるかすをあしのくひにゆふ事の侍るとかや。それもあはねは結びめなし、とよまれたる心のうち、おしはかられて心くるしく侍り。仍、右を勝とす。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 十番右 小原女

一 たきにさももえやすき小原木のあかしもはてす入かたの月

〔道増誹諧百首〕 炭竈 浮舟の行くを問へば手習ひのすりからしたる小野の炭竈 〔詠百首誹諧〕 炭竈 方々に竈はあれども一蔵は炭の中に炭頭かな 〔貞徳百首狂歌〕 炭竈 小野山や煙にあたる草木まで焼かねど炭の色にこそなれ 〔伝馬丸光広作 職人歌合〕 大原人 出立ちして出でぬる時は大原もはやへそへそとやせわたらん 〔言吟我集〕 大原の黒木売はそのさまいやし。いはば薪負へる山路の花の蔭に休める樵の歌のごとし。 炭竈 都人茶の湯を出せば小野山の炭焼く竈も下火つくろふ 〔古今夷曲集〕 百首歌の中に炭竈 小野の奥雪踏み分けて竈元の炭を値切れは結句これたかへ入安 〔後撰夷曲集〕 炭竈 炭焼くに暇もなうして働くは身のくらうなる仕事なりけりへみつなか 山々に我劣らじと賤の男がすみがまんをも立つる煙よへ宣就 浦嶋が箱ならなくに竈の口開けて悔しき炭頭にて 〔行重〕 三百六十首の中に 燐りつつ世にすみがまのけふたきを吹きつけ燃やせ冬の山風へ會祢好忠 黒木売 黒木売るやせ女子の牛にだにさせいさせいといふはおかしも 〔是政〕 〔銀葉夷歌集〕 炭竈 買ふ人をまつ木なんど切り折りに積むや後の山の炭焼へ知秋 百首歌中に 顔の色頭の色に較ぶれば翁が体や雪と炭竈 〔貞徳狂歌集〕 八王子より炭を売りに通ひし者あり 山家育ちにて、ことに色黒く、なりふり見苦しけれど、所の風なれば恥づることなし。これによそへて詠める 炭竈 かつがつもうき世の中にすみを焼き営み繋ぐ小野の山人 〔人倫訓曇図彙〕 炭焼 あやしの山賤の業をも心をつけて観すれば、心を延ぶる便りなり 楨立つ山の奥、檜原の蔭、岩の崖道たどたとしく、谷深き木の問より立ち上りたる煙のありさま、世に類なきは、炭竈の風情なり 重ねの衣は薄けれど、冬の寒さを喜ぶは、炭焼く翁の心、世渡りたつき程悲しきはなかるべし。〔職人尽発句合〕 四十四番左 炭焼 炭竈の夜昼燃ゆるはむらかな 左は夜昼胸を焦がし、右は身も水るとの嘆きは、水火の違ひにていつれも悲し。されど 〔右句〕 ……深かるべき。 三十八番左 大原女 大原木や刀布にかゆる玉の汗 大原女が薪に花を折り添へてと、和歌にも詠みてめでらるるは、都近く住めるこの者の幸ひなるべし。 ……大原女は一しはならむや。 〔頭の揺るがぬは、腰の据えやうにありと知らしめせ〕 〔宝船桂帆柱〕 炭薪屋 養老のたきき売ればや長生きの身も身代も堅炭屋なれ

【本文】

九番

秋まてはけふりもたてぬすみやきの

こゝろとすます月をみるかな

ひとたきにさもゝえやすき小原木の

あかしもはてす入かたの月

左は、月をもてあそふ心ふかけれとも、此

風情、当時連哥などにいひふるしたる

にや。右は、哥合にいりかたとよめる、いさゝか

心なきに似たれとも、たくみなるによりて

為持。

すみかまもわれにはをとるおもひかな

けつこもしらぬこひのけふりよ

かこたるゝ身のほとならはをほら木の

ふすへらるゝもうれしからまし

左、させる難なし。右は、かこたるゝ、ふす

へらるゝ、此るゝの病ありといへとも、心

めつらしきにゆつりて為勝。



けふり―〔類〕煙 すみやき―〔類〕炭やき

こゝろと―〔類〕心と かな―〔明〕〔類〕哉

ひとたきに―〔類〕一たきに さもゝえやすき―〔類〕さも燃やすき 小原木―〔忠〕〔明〕大原木

もてあそふ―〔類〕甌ふ ふかけれとも―〔類〕深けれとも

連哥―〔類〕連歌

いりかた―〔類〕入かた いさゝか―〔類〕聊

たくみなる―〔類〕巧なる

すみかま―〔類〕炭竈 われ―〔類〕我 をとる―〔忠〕おとる

おもひ―〔類〕思ひ

けつこも―〔明〕〔類〕けつこと こひのけふり―〔類〕恋の煙

身のほと―〔類〕身の程 をほら木 〔類〕おほら木

うれしからまし―〔類〕嬉しからまし

めつらしき―〔類〕玠しき

すみやき

けさいて

さいまう

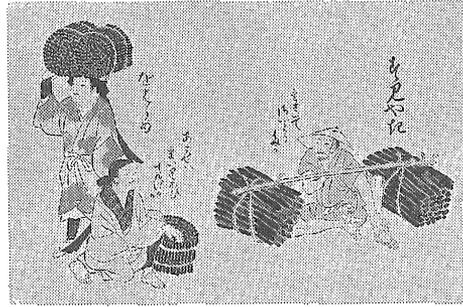
たか。

をはらめ

あこせは

まいりあひ

て候けるか。

すみやき―〔白〕類炭やき〔忠〕九番炭やき

けさいてさいまうたか―〔白〕ナシ〔忠〕けさいてさいまう

たか〔類〕けさいてさいまうたか

をはらめ―〔白〕類＊ほち小原め〔忠〕小原め

あこせ―〔類〕あこせ

あひて―〔白〕〔忠〕逢て

【語注】

◎炭焼は、絵では行商の姿を描くが、歌は二首とも炭を焼く作業を詠み込んでいる。炭を焼くことは各地の山で行われたが、山城国愛宕郡（現京都市左京区）の大原（小原とも）や小野が、古来歌枕として有名。ことに『堀河百首』に「炭竈」が題として取り上げられて以来、大原と炭竈の結び付きは決定的となった（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』「大原」の項）。「炭焼」という職名は以前の職人歌合には見えないが、十二番本『東北院職人歌合』十一番右の「大原人」の月の歌は炭を焼く作業を詠み込んでおり、当七十一番職人歌合では、この「大原人」が、「炭焼」と「小原女」に分化した形になっている。

小原女は、大原から、薪を頭に載せて京に行商に来る女。

両者はともに類似の燃料の生産・販売に関わるばかりでなく、同郷ないし近村の出であると意識されていたのであ

ろう。炭焼の歌には大原や小野の地名は出ないが、絵の中の言葉では、両者が知り合ひであるように見える。

なお、前述のごとく、炭を焼くことは古来歌材として好んで取り上げられて来た。同様の職種に、十一番の山人・浦人、十二番の樵・草刈などがある。

◎秋まではけぶりもたてぬ 「み山木を朝な夕なにこりつめて寒さを恋ふる小野の炭焼〈好忠〉」（拾遺集、十七、雑秋）、「大原や小野の炭竈雪降りて心細げに立つけぶりがな〈師頼〉」（堀河百首、炭竈）などの歌に見られるように、炭焼きは冬の景物であった。従って秋まではまだ煙を立てないのである。

◎ころとすます月 「心と」は、自分の意志で。自ら求めて澄ます月。炭を焼く煙が立たないので、月が澄んでいることをいう。実は、秋の月はもとより澄んでいるのであるし、炭焼が秋に煙を立てないのも、職能上の必然であるのだが、それを、秋の名月を鑑賞したいという炭焼の風流心から、あえて煙を立てずに、月を澄ませているのだ、と見立てた。

◎ひとたきに…… 『飛鳥井雅康 職人歌』十番右に同じ。

◎ひとたきに 「一焚き」は、多くの薪を一度に焚いてしまうことで、「一焚きに」は、燃えやすいことの形容である。

◎小原木 大原で産する、黒く蒸した薪。乾燥しているので、燃えやすい。

◎あかしもはてず入かたの月 「明かす」は、火を付けること。小原木の燃えやすいことを、「明かしも果てず」、すなわち、火を付けたか付けない中に燃え切ってしまうと、誇張したのである。火を「明かす」に、夜を「明かす」を懸ける。「入り方の月」は、西に沈もうとする月。明かしも果てぬ小原木のように、夜を明かすか明かさない中に、もう沈もうとする月。一晚中月を眺め明かして、なお満ち足りぬ気持ちをいう。

◎もてあそぶ 愛で楽しむ。

◎此風情、当時連哥などにいひふるしたるにや 「此の風情」は、炭焼が風流心から、秋までは煙を立てず月を澄ます、という見方を言うのである。それが、近年の連歌などで使い古された陳腐な趣向ではなからうか、というの

であるが、その具体例については、未考。

◎哥合にிரりかたとよめる、いさゝか心なきに似たれども「心なし」は、「無心」とも言い、「心あり」(「有心」)の対語。一般的には思慮を欠く、情を解しないの意であるが、歌論用語としては、題意に対する理解がないことを意味した(『和歌大辞典』「無心」の項)。ここは、歌合において「月」という題をどのように詠むべきか、十分に理解していないことを言う(一番語注「哥合にはかたふく月あやなくきこゆ」の項参照)。五番右、車作の歌に対する、「月を曲げ入るる事、入る月を願ふに似たり。すこし心なきにや」、四十七番右、弓取の歌に対する、「月の哥に入り方は、心なきに似たり」、五十四番左、矢細工の歌に対する、「在明は月の哥に心なきに似たり」の判詞も、みな同様。なお、左の歌に、「心深けれど……言ひ古したる」というのに対して、右の歌に、「心なきに似たれども、巧みなる」と、対照的な評価を下している。

◎すみがまもわれにはをとるおもひかな「思ひ」の「ひ」に「火」を懸ける。炭竈の火を苦悩の火だと見立てた上で、その火も私の恋の苦悩には及ばない、とする。

◎けつこもしらぬこひのけぶりよ「けつこも」は、「消つ期も」で、消す時も(知らぬ)の意か。明暦板本、類徒本には、「けつこと」とある。誤写かと思われるが、これでも、ほぼ同じ意味になる。「こひ」の「ひ」に「火」を懸ける。恋の思いを火に譬えたもので、「火の煙」と続く。先の炭竈の「思ひ」と対照されている。「消つ」、「火」、「煙」は、いずれも「炭竈」の縁語。炭竈の火は、春になれば消すものであるが、いつ消すことができるとも知らない我が恋の煙よ。

◎かこたるゝ身のほどならば 相手から我が身のつれなさを恨まれるような境遇であれば。実は、そうではなく、逆に、自分が相手のつれなさを恨んでいるのである。

◎をはら木の 小原木のように。「燻べらるる」に懸かる。

◎ふすべらるゝもうれしからまし 小原木の「燻べらるる」に、我が身が「燻べらるる」を懸ける。「燻ぶ」は、いぶすことであるが、比喩的には、嫉妬することをいうことが多い。そのように解すれば、小原木が燻べられるよう

に、嫉妬されたとしても、という意味になるが、これでは上下句で相似たことを繰り返していることになり、恋の歌としての迫力にも欠ける。ここは、小原木のように、身を焼かれる、というほどの意味に取り、恋のために苦しめられる、さらには、身の破滅を招くようなことになっても、かえって嬉しいことであろうに、と解すべきであろう。

◎るゝの病「病」は、歌の修辞上の欠陥。歌病。一般に歌病は中世の歌論ではあまり重視されないが、歌合の判詞では比較的よく問題にされる。「るゝの病」は、「託たる、」「燻べらる、」と「るる」が重複していることを指す。『俊頼髓脳』、『竹園抄』などで、「文字病」、「同字病」（いずれも、一首の歌の中に、同語、または同音異義語などの、同音が重複していること）とされる病に当たる。

◎けさいでさいまうたか 白石本は、この語を落とす。類従本は、「けさいでさうまうたか」と校合。忠寄本の「けさいでさうい、まうたか」とするのも、類従本と同じ意味であろう。結局、「さいまうたか」、「さうまうたか」二種類の本文があったことになるが、「さいまう」「さうまう」ともに、室町時代に行われた尊敬の助動詞「さしも」の連用形「さしもう」が転化した形であろう。ただし、この両形は抄物等にも見られず、かなり砕けた言い方であったのではなからうか。そうだとすれば、伊勢貞丈の『職人尽歌合詞書の内難解』に、「今朝御出なさいましたか、といふ詞の略なるべし。いやしき言葉なるべし」というのは、おおむね当たっていると見てよからう。右の小原女に対して言った言葉であろう。

◎あこせはまいりあひて候けるか 腰を下ろしている方の女の言葉であろう。「あこせ」は未考。「あこぜ」または「あこぜ」と読み、「あこ・あご（吾子）」に同じで、炭焼が「今朝出でさいまうたか」と話しかけたのに対して、「どこかで内の子にお会いになりましたか」と尋ねたのか。あるいは、「あこぜ」と読み、女性を親しんで呼ぶときの対称代名詞「わごぜ」に同じで、炭焼の言葉を承けて、立っている方の女に、「あなた、この人（炭焼）と、先にごかかて出会ったのですか」と問いかけた言葉か。いずれにしても、炭焼きとの応答があったものと思われる。

【絵】

炭焼は、行商の途中、前後に炭を括りつけた杓を下ろして休んでいる所。筒袖姿で笠を着、草鞋を履く。

小原女のうち、腰を下ろして休んでいる方の女は、頭巾をし、小袖の上に打掛を着、脚絆（当然、手甲もしている）であろう。ただし、十二番本『東北院職人歌合』の大原人は手甲はしていない、草鞋を履く。脇に黒木の束。いま一人は、同じく頭巾をし、小袖を着、手甲、脚絆をつけ草鞋を履く。頭に黒木二束を載せて、典型的な小原女の姿。

【参考】

○木買うし、く。小原木召され候へ。小原、静原、芹生の里、隴の清水に影は八瀬の里人。知られぬ梅の匂ふや、く。此の藪里の春風に、松が崎散る花までも、雪は零れて春寒し。小原木召されよ、小原木召され候へ。

（天理本狂言「若菜」）

○ 赤く黒うて中はうそく

○ 小原野に炭焼く竈の口を見よ

○ 野には道ある山の薄雪

○ 炭やきの一重衣の冬待ちて

○ 木を初る昔の霞む奥山

○ 年越ゆる炭の翁はいとふらん

○ 初雪急ぐ小野の炭竈

○ 住みわびぬ思ふことのみ大原や

○ なげきこる日の帰るさの道

○ 炭竈の烟たえぬる春は来て

○ 思ひある我こそやせの里をとへ

○ 山の焼木を負へる馬方

〈救済〉

（紫野千句、十）

〈専順〉

（初瀬千句、二）

〈能阿〉

（文安雪千句、六）

〈専順〉

（顕証院会千句、四）

〈専順〉

（顕証院会千句、八）

- 山近き里より雪や待たるらん
賤は炭焼き送る冬の日
- 遠山鳥いづち行くらん
炭焼の頭は白く年老いて
- 大原や横河の寺を上に見て
杉の庵に帰る炭焼
- 霞しく野山を春は分けくらし
寒きを焼くと運ぶ炭竈
- 宿りをしむる大原の山
里遠く炭焼く方の峯越えて
- 住む里の名の明かし暮しつ
降る雪を小野の炭焼頼み来て
- をのれと今ぞ遠ざかりぬる
炭竈のけぶり消え行く小野の春
- 寒くなるけしきに雪や待たるらん
里よりいづる小野の炭焼
- 大原や登るおひえの道遠み
雪にけぶりのしるき炭竈
- 墨になさむも袖はいとはじ
爪木焼く大原山の寒き夜に
- 秋のあわれの大原の山

〈吉理〉

(宝徳四年千句、二)

〈宗砌〉

(宝徳四年千句、九)

〈日晟〉

(享徳千句、八)

寒きを焼くと運ぶ炭竈

(異体千句、二)

里遠く炭焼く方の峯越えて

〈專順〉

(美濃千句、五)

降る雪を小野の炭焼頼み来て

〈甚昭〉

(表佐千句、五)

をのれと今ぞ遠ざかりぬる

〈宗怡〉

(熊野千句、四)

炭竈のけぶり消え行く小野の春

〈行動〉

(熊野千句、十)

寒くなるけしきに雪や待たるらん

(三嶋千句、六)

里よりいづる小野の炭焼

〈宗長〉

(東山千句、二)

墨になさむも袖はいとはじ

爪木焼く大原山の寒き夜に

秋のあわれの大原の山

注解『七十一番職人歌合』稿(三)

里からやすみよかるべき夜はの月

〈宗碩〉

(東山千句、六)

○ ふぶき冬立つ朝明けの空

炭竈のこなたの里の薄烟

〈兼載〉

(永原千句、二)

○ 炭竈の煙も雪も消えなくに

小野の若菜はもえやそむらむ

〈兼良〉

(新撰菟玖波集)

○ あはれにも真柴折りたく夕ま暮れ

炭売る市の帰るさの山

〈心敬〉

(同)

○ 袖木とる山をあまたに分け入りて

峰に炭焼く信楽の里

〈行動〉

(同)

○ けぶりぞ昇る奥の炭竈

けだものかける雲居は遠き世に

〈宗伊〉

(同)

十番 馬買はう 皮買はう

【職人尽】

〔鶴岡放生会職人歌合〕 九番右 博勞

御空行月毛のこまをひきとめてひのくま川にすみそあらはん

なへて世の人にたなれのあた心つけすまひこそよしなかりけれ

判云、月は……さくのくまにかけたに、といへる哥をとりて、すそあらはんといひなしたる、興あるへし。為

持。恋は、両方の作者、申なれたる詞つかひ、思ならはしたることへき、哥となりてもいひしりて侍へし。さる

にても、左うるはしく侍り。為勝。

〔吾母我集〕寄馬恋 口こはくひくにひかれぬうき人の心の駒の手繩しらはや 〔大同〕寄馬恋 秋の夜の月毛の駒も身振るひか恋の使ひはなんば憂きもの 〔今様職人尽歌合〕博勞 よき駒をあまたひさぎていつしかに我が伏櫪の年と老いたり 左、老馬伏櫪は桓温が古事にて、博勞の述懐、さもあるべく覚ゆ。右、…馬屋のまやすけが草食ふべくもあらぬ嘆きをのべたる、おかしければ、鬨の太鼓は左の馬飼に打たすべし。「陸奥立ちの若駒にこそ候はめ。紫手綱、藤の紋もおおしく見参らせて候」 〔徒老よき池鯉鮒の里に馬はあれど逢ふに命を換へに行く夜は 左、逢ふにかふといふ詞にて博勞とは知らる。…左右無勝勞。〕 〔桜咲く花の所は博勞も勇める駒を心して引く 左右同等なり。論ずるに及ばず。〕 花風吹くを厭ふか伯樂が桜の馬場に馬は責むれど 〔枝折せで桜の雪に迷ふ時嫌ふ老馬のほしき博勞 〕 勇みては散らしし花の雪の日や駒をしるべに帰る博勞 〔博勞も我がなりはひを忘れけり花に心の駒を繋ぎて 〕 花にみな心の駒を繋ぎ置けや山のかひにと登る博勞 〔博勞もあひ見るこののかたければ赤兎馬かぬる憂き涙かな 〕 妹が尻叩きし袖に握る手のつひに根組も出来る博勞 〔吾妹子が心の駒を引きつ直をするさまに手を握りては 〕 博勞の背中叩くを合図にて袂に手をば握る嬉しさ 〔我が胸もあけていはれぬ袖の内に握り合ふ手や恋の博勞 〕 〔難波職人歌合〕下 四番右 伯樂 手綱をば延べつ 縮めつ 荒駒の心も引けば引かるるものを 左の方人云、万葉集に、赤駒を打ちてさ緒引き心引き、とあるに依られたりと見ゆ。心明らかにて、申す旨なし。判に云、此の番は、左右ともに万葉振りに詠み得られて、心詞ともに、安らかにめでたし。よき持と云ふべし。

【本文】

十番

秋の夜もかきりありけり馬かはう

こゑすむほとのおけかたの月

いけはきのかはかほうときなかわれは

あかはたかにもすめる月かな

左右ともに、おのれか時の月をよみた

れは、月のなんあるへからす。右は逸興

注解『七十二番職人歌合』稿(三)

秋―〔尊〕〔類〕 夜―〔類〕よ かきりありけり―〔類〕限有けり

こゑ―〔類〕声 あけかた―〔類〕明方

かはかほうとき―〔類〕皮かはう時

かな―〔類〕哉

おのれ―〔忠〕〔明〕〔類〕をのれ よみたれは―〔類〕詠たれは

なん―〔尊〕なむ〔類〕難

あるにたり。仍為勝。

むまかはうはくらうときのたち君の

よひあかつきにかよひなればや

あさかへり道ゆきふりのかはかはう

我あひつると人にかたるな

左哥、身におふ恋とおほえて、たち君に

よせたり。心あるにたり。はくらう時、又

よせあるにや。右、わかれちの時分行あふ

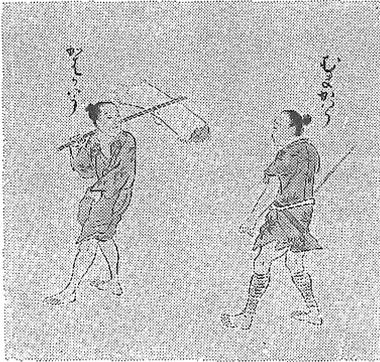
へき事、眼前也。心詞おなししなゝるへし。

為持。



むまかはう

かはかはう



たり一〔類〕似たり

むまかはう一〔類〕馬かはふ はくらうとき一〔類〕はくらう時

たち君一〔類〕立君

よひあかつき一〔類〕宵晝

あさかへり一〔忠〕明あさかへる〔類〕朝かへる 道ゆきふり

一〔類〕道行ふり かはかはう一〔類〕かはかはふ

あひつる一〔類〕逢つる

左哥一〔類〕左歌 たち君一〔類〕立君

よせたり一〔類〕寄たり にたり一〔尊〕類たり

わかれち一〔類〕別路 行あふへき事一〔類〕行逢へきこと
おなししなゝるへし一〔忠〕明おなししなるへし〔類〕同品
なるへし

むまかはう一〔忠〕^{十番}むまかはう〔類〕むまかはふ

かはかはう一〔白〕〔忠〕かわかはう〔類〕かはかはふ

【語注】

◎馬買はうは、馬を売買する商人、すなわち博労、皮買はうは、獣皮を売買する商人らしいが、その実体については未考。ともに、こう呼ばわって歩いたことから来た職名であろう。

◎秋の夜もかぎりありけり 長いとされる秋の夜も、結局は限りがあるのだ。名月に見とれているうち、思わず知らず時が経ち、早くも明け方になって月が沈もうとする、その月を惜しむ気持ち。月を愛でる心には秋の夜も長くは感じられない、という内容の歌には、「菅の根のながながしといふ秋の夜は月見ぬ人のいふにぞありける（藤原長能）」（後拾遺集、五、秋）、「秋の夜の長きかひこそなかりけれ待つに更けぬる有明の月（右大将忠経）」（新古今集、四、秋）がある。

◎馬かはう 馬買はうの呼び声であろう。「馬を買い取ろう」という意味にも取れなくはないが、不特定多数の住民を相手にするのは不自然である。逆に、「馬を買え」と言っているのではなからうか。狂言『末広がり』などで、都に上った田舎者が「売り買ふ物も呼ばはって歩けば、物ごと早速知るさうな」という台詞について、安田章氏が、「都で商人が品物を売るために呼び歩くのを、買うときにもどなって歩くのだと勘違いした。つまり『買へ』の間接的表現である『……買はう』という売り声を『買いたい』という意味に取り違えたのである」（日本古典文学全集『狂言集』）とされるのが参考になる。似た売り声に、「伊勢国に阿漕が浦の猿源氏が鯛か、ふゑい」（猿源氏草紙）がある。もっとも、今の場合、次に述べるような、馬買はうが歩いた時間を考慮すると、この考えも少なからず不自然である。馬買はうが歩いたのは、下旬に「明け方の月」とあり、判詞にも「おのれが時の月を詠みたれば、月の難あるべからず」とする点から、未明の頃と思われるが、恋の歌の「立君の宵曉に」の句からすれば、宵にも歩いたのであろうか。あるいは、宵から曉にかけての夜間が馬買はうの歩く時間であったのかも知れない。そうだとすれば、先の「秋の夜も限りありけり」は、馬買はうが実際に夜通し歩いていて、おそらくあまりはかばかしくない中に、早くも明け方になってしまった、という気持ちを懸けていることにならう。

◎こゑすむほど「澄む」は月の縁語。「程」は、ここでは時間の程度を表し、「頃」の意。「声澄む」は、「江に浸

す半ばの月に声澄みて荻吹く風の秋ぞ悲しき〈民部卿為家卿〉（夫木抄、十一、秋、荻）、「友誘ふ湊の千鳥声澄みて氷に牙ゆる明け方の月〈和泉式部〉」（続千載集、六、冬）、「高砂の尾上の月に鳴く鹿の声澄みのぼる有明の空〈前大納言経継〉」（新拾遺集、五、秋）、「更けぬるか歌ふ神楽の声澄みて取るや袖も霜結ぶなり〈公冬〉」（永享百首、冬、神楽）など、しばしば、秋または冬の、深更から夜明けにかけての情景に用いられる。これも、秋の明け方。ただし、「声澄む」の「声」は、右にも見るとおり、風、千鳥、鹿、神楽などの声が普通で、馬かはうの声というのは、勿論異例である。

◎いけはぎ 「生け剃ぎ」で、鳥獣を生かしておいたまま皮を剥ぐこと。上代の「天つ罪」の一つとして有名だが、室町時代の皮買はうが実際に行ったとして、どのような利点があったのか、未考。

◎かほかはうどき 「生け剃ぎの皮買はう」から「皮買はう時」と続く。「生け剃ぎの皮買はう」と呼ばわって歩く皮買はう時。「皮買はう」は、先の「馬買はう」と同じく、「皮を買え」ということの間接的表現ではないかと思うが、皮買はうが出歩いた時間を考えると、これもはっきりしない。「皮買はう時」は、皮買はうがこのように触れ歩く頃の意であるうが、他に用例が見当たらず、この言葉がどれほど一般的であったか、不明。いずれにせよ、判詞に、「左右ともに、おのれが時の月を詠みたれば、月の難あるべからず」とあるから、本来なら月を詠むのにふさわしくない頃、すなわち、馬買はうの歌で詠まれたと同じ明け方頃をいうのであろう。恋の歌にも、「朝帰り道行きぶりの皮買はう」とあり、その判詞でも、「別れ路の時分行き合ふべき事、眼前也」とあって、この点からも、皮買はうが出歩いたのは早朝であったことが分かる。なお、『中世職人語彙の研究』は、恋の歌の「朝帰り（る）」を、皮買はうが仕事を終えて、朝帰ることと解したのか、「皮買はう時」は夜のこととするが、いかが。

◎あかはだか 「赤裸」は、真っ裸。ここでは、月を覆う雲・霧などがないことをいう。「生け剃ぎ」から「赤肌」（皮を剥いたり毛を抜いたりして赤くなった肌）を連想して、「赤裸」と続けた。「赤」に「明かし」の「明か」を懸ける。月の色が「赤」い、とも取れなくはないが、「明か」るい、と取った方が、月を褒める歌にふさわしい。「赤裸」は、勿論、雅語ではない。あえてこのような俗語を用いた点に、この歌の面白さがある。『犬つくば集』に、「雲

の衣をたれか剝ぐらむ／いつもより今宵の月は赤裸」の付合があり、この歌との関連が注目される。

◎左右ともに、おのれが時の月を詠みたれば、月の難あるべからず 左右ともに自分の職能に関わる時の月をうまく詠んでいるので、この場合は、傾く月を詠んだという非難はするべきではない（一番語注「哥合にはかたふく月あやなくきこゆ」の項参照）。

◎逸興「一興」とも書く。一風変わった面白さ。歌論用語としては、「面白き体」と同様の意味で「逸興（一興）の体」という語が用いられた（『和歌大辞典』「一興の体」の項）。こゝは、皮買はうの歌が、「生け剝ぎ」や「赤裸」といった生々しい言葉を、巧みに月の歌に詠み込んだ点をいうのであろう。

◎むまかはうばくらうどき「馬買はう」と呼ばわって歩く博労時、という意味であろう。「博労時」は、博労すなわち馬買はうが商売をする時間であろうが、この言葉も他に用例が見当たらず、どれほど一般的であったか、不明。判詞でも、「博労時、又寄せあるにや」と言っているから、よく分からなかったのではなからうか。「立君の宵曉に」と続くことからすれば、宵、または宵から曉にかけての時間であったように思われる。

◎たち君「立君」は、路傍で客を引く娼婦。当職人歌合三十番左に登場する。「立君」の「たち」に、「博労時」の「経ち」を懸けるか。馬買はうと立君との関係について、『中世職人語彙の研究』は、五条室町に馬市が立ち、同時に五条あたりは立君の立つ所でもあったことを指摘している。「……立君の」は序詞で、宵ごとに立つ立君のように、私も毎夜恋人のもとに通い馴れたい、と下句に続く。

◎あさがへり 忠寄本、明暦板本は「あさかへる」、類従本も「朝かへる」。いずれにしても、一首の意味に大差ない。恋人のもとから朝帰ること。『中世職人語彙の研究』はこれを、皮買はうが商売を終えて朝帰ることと解しているようだが、そうすると、次の「道行きぶりの皮買はう」にうまく続かない。

◎道ゆきぶりのかはかはう「道行きぶり」は、道の途中で行き合うこと。朝帰りの途中行き違った皮買はうに呼び掛けているのである。この歌は皮買はうの歌であるから、本来なら皮買はう自身の恋を詠まなければならぬが、実は皮買はうに出会ったある男の歌になっている。職人歌合の歌としては、失敗作ではなからうか。もっとも、判詞

ではこのことに何ら触れていない。

◎我あひつると人にかたるな「我あひつる」は、恋の歌であるから、私が女に逢った、と取りたいところだが、上句からの続きでいえば、私がお前（皮買はう）に出会った、と取るのが自然であろう。女との関係の発覚を恐れる気持ち。

◎身におふ恋とおぼえて、たち君によせたり「身に負ふ」は、身に相応する。皮買はうは、獣皮を扱うということ、賤民視されていたのであろう。同様に蔑視されていた立君に関連づけた点を、身分相応だと評したのである。

◎心あるににたり「心あり」は「有心」とも言い、「心なし」（無心）の対語。一般的には、対象に深い理解を持つこと、従って思慮がある、情を解するなどの意味であるが、歌論用語としては、題意に深い理解を示すことを基本的な意味とし、具体的な内容は時代・論者によってさまざまに変遷した『和歌大辞典』「有心」の項）。ただし、ここではそのような歌論用語を用いて、判詞をもっともらしく仕立てることに意味があったのであり、何か特定の理念を表現しようとしたものではあるまい。単に、馬買はうがその身にふさわしく、立君に事寄せた巧みさを「心あるに似たり」と言ったものと思われる。

◎ばくらう時、又よせあるにや「寄せ」は、「寄す」の名詞形。和歌で、ある事柄に関連する言葉。縁語など。「博勞時」というのも「立君」と同じく、「馬買はう」（または「宵暁」など他の言葉）に関連する言葉なのであろうか、というのである。「博勞時」という言葉が判者にもよく理解出来なかったようである。当七十一番職人歌合の成立事情については、ほとんど何も分かっていないが、この判詞を素直に解釈すれば、少なくとも、歌の作者と判者とは別人であった、ということになる。

◎わかれぢの時分行あふべき事、眼前也「眼前」は確かな様。女のもとから帰って来る朝方、皮買はうに出会うというのは、いかにもありそうなことだと、歌を褒めているのである。

◎心詞おなじしなるべし 右歌の心、詞が、左歌のそれと同じ程度にすぐれている、というのである。

◎むまかはう 職名を示すとともに、「馬買はう」という呼び声も兼ね表しているのであろう。

◎かかはかほう 前項と同様、「皮買はう」という呼び声を兼ね表しているのであろう。

【絵】

馬買はうは、半袖の着物を着、脚絆を履き、腰刀を差して鞭を持つ。素足。明暦板本・類従本は、草鞋を履く。皮買はうは、襖子に四幅袴を履き、皮を括りつけた棒を肩げる。素足。白石本・忠寄本・明暦板本・類従本は、草履を履く。

【参考】

○私は馬博勞でござるが、御制札のごとく早々参つて一の杭に繫ひでござれば、いつの間にかあそこな者が参つて、結句私にのけと申すほどに、それを申し上がつてのこととござる。
(虎明本狂言、牛馬)

○それ馬は馬頭観音の化身として、仏の作る法の舟、月氏国より漢土まで、馬こそ負いて渡るなれ。周の穆王の八匹の駒、楚のかふうの望雲騅、安祿山の驍驪まで、いづれも千里を駆けるなり。その管仲は旅に発ち、にわか大雪降る里に、帰らぬ道を忘れつつ、馬を放ちてその跡を、しるべとしつつ帰りしは、馬の徳とぞ聞こえける。又我が朝に名を得しは、天斑駒を始めとし、光源氏の大將や、馬に稲飼う須磨の浦、赤月・南嶺・木の下や、夜目なし月毛・鬼葦毛、源太・佐々木が名を上げしは、生食・磨墨・太夫黒、雲の上にも望月の、駒迎へせし逢坂の、小坂の駒も心して、引く白馬の節会にも、牛の練り入る例なし。仏の前には絵馬を掛け、神には立つる幣の駒、駒北風に嘶ふれば、悪魔はさつと退きぬ。めでたきことを競い駒、されば本歌にも、逢坂の関の清水にかけ見えて今や引くらん望月の駒、とこそ詠まれ候へ。いつの習ひに、望月の牛と詠まれたる事はござあるまひ。
(天理本狂言、牛馬)

○いいでいでは鬼に乗り、秘術を顯し見せ申さんと、昔も今もなき事なれば、鞭や手綱・腰鐙の、大事はここぞ、跳ね馬・立つ馬こむ時の、大事を残さず乗らんと思ひつつ、手綱を引き詰め、鐙を強く鞭を振り上げ、先の呵責の無念を散せんと、したたかにこそは打つたりけれ。……ただ今左にみみゆるこそ、く浄土の道なれ、ここを行き

過ぎ地獄へ行ては叶ふまじと、左の手綱を強く引き詰め、右の手綱を差し寛げて、小耳の間をちやうちやうと打ちければ、ただ一馬場に浄土へ駆け入り、鬼をも誑す馬口勞の、鬼をも誑す馬口勞の手だた、^{ママ}恐れぬ閻魔はなかりけり。

(天理本狂言、馬口勞)

前稿訂正

前稿「注解『七十一番職人歌合』稿(二)」の中、四番語注「今はとていつうちとけてあひみそめまし」の項(七十二頁)の「帯を『解く』を、」帯が『解く』に訂正する。この点に関しては、鈴木博氏の御教示を賜った。記して謝意を表する。